

この一覧は事前告知に使用したもので実際の講演とは一部異なります。

ソフトウェア・シンポジウム2009 2009年6月17日 無料講演日 招待講演一覧

講演者氏名	セッション名	所属	講演タイトル	講演概要
中島 秀之	キーノート	公立はこだて未来大学学長	新しい社会を創る情報技術 ～ サービス工学の方法論を中心として	ソフトウェア科学という分野は、自然科学と異なり、新しいものを構築する学問体系である。したがって、自然科学の分析的方法論とは異なる体系を必要としている。その体系として構成のループを提示し、その一例として新しいシステムを創るためのサービス工学の考え方を提示する。応用例として、現在の社会システムを情報化するのではなく、ITによって初めて可能となるより良い社会のイメージを提示する。
g新部 裕	FLOSS	独立行政法人産業技術総合研究所 / フリーソフトウェアインシアティブ理事長	自由ソフトウェアの責任、僕の逡巡	「無いなら作る」。GNU Project は25年前、勇ましくも開始された。Linux をカーネルとして加え、自由の OS は実現した。GNU/Linux は今やネットワークサービスを実現するシステムから携帯電話まで広く利用されるまでになった。「あるものは使え」。これが開放型のソフトウェア開発の掟となった。自由ソフトウェアの歴史を振り返りつつ、自由ソフトウェアの主要な出来事やトピックスを解説し、自由な社会を展望する。
三浦広志	FLOSS	NTTデータ/OSS推進フォーラム	OSSで高度IT技術のスペシャリストへ - 活躍の基盤を目指して	2008年10月OSSを活用したITカリキュラムがIPAから発表されました。これをベースとしたプロジェクトの一つに、日本・韓国・中国でのOSSスキル定義の共通化があります。このプロジェクトは3国のOSS技術スキルを共通の枠組みで確認できる仕組みを目指しています。一方で、ITスキル標準レベル4以上の高度IT技術者には、知識、スキルだけでなく、経験・実績が求められます。NTTデータでは、ITスペシャリスト、ITアーキテクトの認定を通じて、高度IT技術者がビジネスでいっそう活躍できる仕組みを構築しています。講演者はこれらの取り組みを推進しています。2つの推進事例を俯瞰し、技術者の卵が高度なIT技術スペシャリストへステップアップしていくために、どのような支援が必要か、その活躍できる環境とは何かを、みなさんと議論したいとおもいます。
佃均	ジャーナリズムから見たIT	ITジャーナリスト/IT記者会代表幹事	IT記者が議論するー日本のソフトウェアの未来(パネル形式) パート1 日本のソフトウェア産業に未来はあるか? パート2 日本のITエンジニアは未来をどう切り拓くべきか?	日本のIT産業、特に情報サービス/ソフトウェア産業を取り巻く環境は、厳しさを増す一方である。不況に伴うIT投資の急減速や強まる一方のコストダウン要求はもとより、短納期化と信頼性という相反する要件の両立、多重下請け構造という条件下における複雑で高度なシステム開発、仮想化など高度化するITにキャッチアップできない技術者の増加、今なお不条理な要求を突きつけるユーザー企業・・・。“ハイテクの冠をかぶった人貸し業”に、果たして未来はあるのか。日本のIT産業を長年ウォッチしてきたIT記者2人が、対談形式で議論する。(下記欄につづく)
田口潤	ジャーナリズムから見たIT	インプレスビジネスメディア	IT記者が議論するー日本のソフトウェアの未来(パネル形式) パート1 日本のソフトウェア産業に未来はあるか? パート2 日本のITエンジニアは未来をどう切り拓くべきか?	(上記欄より) パート1 技術力あるいは製品やサービスの力で勝負するはずが、顧客企業や元請けとの人間関係、資本関係で勝負するー。そんな状況が長年続いてきた日本のソフトウェア産業。いつまでもそんな状況が許されるはずはない。パート1では現状と原因を探りながら、改革の芽や方向性を議論する。 パート2 今、ITはようやく「人、モノ、金」に続く第4の経営資源として認知されつつある。したがって日本に産業が存在する限り、ITに対するニーズはなくなるならない、むしろ増大する可能性が大きい。当然、IT人材に対するニーズもなくなるならないが、求められるIT人材がこれまでと同じかどうかは別問題である。パート2では、日本のIT人材にスポットを当て、あるべき姿を議論する。

招待講演一覧

長谷川 晶一	拡張現実	電気通信大学	複合現実感環境でのキャラクタとのインタラクション	複合現実感技術をはじめとしたインタフェース技術により情報世界に対して身体的で直感的なインタラクションが可能になった。このため、ユーザと対話するエージェントやエンタテインメント作品を表現するキャラクタは、ユーザの行動に応じてさまざまなに反応することが必要となってきた。本公演では、複合現実感環境でキャラクタとの自然な身体的インタラクションを実現するためのシミュレーション、制御、提示技術を紹介する。
伊藤博之	拡張現実	クリプトン・フューチャー・メディア代表取締役	初音ミク as an interface 役	「初音ミク」は、当社が2007年夏に発売した"歌を歌う"ソフトウェアである。DTM向けのニッチな製品にも関わらず、既に4万本以上を出荷し、音楽ユーザーに限らない多分野のクリエイターを巻き込んだムーブメントを形成している。「初音ミク」をクリエイター同士(または観客同士)を結び付ける"インターフェース"の視点で見たとき、そこに求められる仕様と、著作権法とのコンネクティビティについて議論する。
細川宣啓	ユーザ	日本アイ・ビー・エム	調整中	調整中
熊野憲辰	ユーザ	ゼリア新薬工業	ユーザ企業から見たIT産業・基盤への問題提起	ユーザ企業のIT部門の視座より、現在のIT産業・IT基盤に関する問題提起を行う。現在のIT基盤は多層化、隠蔽化され、もはや鈍重な存在だ。簡単にバージョンアップもできない。多層化・隠蔽化は、そもそも変化に強くあるために行われたはずなのに本末転倒である。また、ベンダー主導で進められるプロジェクトはプロマネだらけで、兎に角お金がかかる。このような現状について、現場の事例を交え赤裸々に語りたい。そして、このような問題を打破するために、ユーザ企業によるシステム開発のあり方について考察をする。
手嶋守	オープンソース活用	手嶋屋代表取締役	「組織活動を支援するソフトウェア」- OpenPNE3.0	近年、企業はリストラやM&Aなど、組織コミュニケーションの危機が叫ばれており「チームワーク」や「絆」といった要素が改めて見直されている。こうした環境下で、ソフトウェアの役割は従来の「業務の支援」から「組織活動そのものの支援」へと拡大しつつある。OpenPNEはSNS、ソーシャルメディア、社内ポータルなど、組織に関わるさまざまなサイトを構築できるオープンソースソフトウェアであり、官公庁からファンクラブ、オンラインゲームまで30,000以上の組織に利用されている。本セッションでは、「組織を表現し、組織活動支援するソフトウェア」のコンセプト、OpenPNEの最新版であるVer3.0の機能や特徴を紹介し、よりよい組織コミュニケーション向上の手法や事例を提示する。
松岡聡	オープンソース活用	東京工業大学学術国際情報センター教授	「アクセラレータ再び」TSUBAME1.2におけるペタスケールへ向けた飛翔	TSUBAME は東工大がNEC, Sunなどと共同で構築した、我が国ではじめて地球シミュレータを扱ったスパコンであり、1000人以上の学内外や企業ユーザを擁するが、2008年10月にNVIDIA社のTesla GPUを追加し、公開スパコンとしては世界最大のGPU加速されたものとなった。GPUの高密度高並列ベクトル演算性能・および広大域メモリにより、多くのアプリケーションにおいて10倍から数百倍の加速が得られている。2010年にはさらに性能をアップした新たなTSUBAME2.0の計画が進んでいる。
歌代 和正	セキュリティ	株式会社インターネットイニシアティブ 特別研究員	ソフトウェア技術者は脆弱性のない世界を夢にみるか	TBD

招待講演一覧

渡邊聡 奥山謙	セキュリティ	ソニーデジタルネットワークアプリケーションズ	ソフトウェア開発組織のためのコストに見合ったセキュリティ対策	組込み製品もPCソフトやITシステムのようにネットワーク化が進み、ソフトウェア脆弱性のリスクも高まってきました。しかしながらエンドユーザーのセキュリティへの認識は低いままであり、セキュリティ対策にあまりお金をかけられない状況にあります。そんな厳しい状況の中でも、わたしたちはソフトウェア技術者の誇りにかけて、少ない予算・時間の中で可能な限りのセキュリティ対策を盛り込むソフトウェア開発手法の開発と実践、改善を続けています。今回の講演ではわたしたちの取り組み事例を紹介します。また、脆弱性の発見から解析、攻撃コード作成といった一連のクラッキングのデモと、静的解析ツールによる脆弱性検出のデモも行います。
鈴木克明	教育	熊本大学	教育設計学はソフトウェア技術者育成にも役立つか	eラーニングを支える学問的根拠としてわが国に「輸入」されて注目を集めるようになったインストラクショナルデザイン(教育設計学)の半世紀の歴史と構成主義心理学やWeb2.0に影響されて変貌を遂げつつある動向を紹介し、今後のソフトウェア技術者育成に教育についての専門職能がどう役立つかを考えたい。また熊本大学で展開しているeラーニングの専門家を育成するためのオンライン大学院での取り組みを事例として、インターネット上の遠隔教育がもつ新たな可能性や限界とそれを乗り越えるための工夫について議論したい。
日下部 茂	教育	九州大学	緊密な産学連携に基づく自律的なICT人材育成の試み	九州大学大学院システム情報科学府では次世代の情報技術を担う人材、次世代の情報社会をリードする人材を育成するため、文部科学省の支援、日本経団連傘下企業との大規模な連携体制の下で、新しい修士課程教育コースである「社会情報システム工学コース」を設置した。従来の修士課程教育と異なり、外部講師によるオムニバス講義やPBL(Project Based Learning)の比重が高い点などに特徴がある。本発表では、その内容と、方法、実績、今後の課題などについて述べる。
高橋孝一	フォーマル	産業技術総合研究所	フォーマルメソッドの実問題への適用について	産業技術総合研究所システム検証研究センターでは、企業との共同研究を通してフォーマルメソッドを実問題に適用する試みを数年間に渡って行っている。本講演では、これまで行った試みの概要と、そこから得られた知見とこれからの展望を論じる。
緒方和博	フォーマル	北陸先端科学技術大学院大学	代数仕様言語・処理系のシステム検証への応用	ソフトウェア危機が叫ばれて以来、形式検証に関する研究は熱心に行われてきた。モデル検査の成熟にともない、昨今では国内の企業も形式検証に強い関心を持ち始めたようである。主に用いられる形式検証技術は、モデル検査に加え、定理証明がある。CafeOBJやMaudeは代数仕様言語・処理系であるが、定理証明やモデル検査の機能をそなえる。これらの言語・処理系の実例への応用をとおして検証に関する知見を蓄積してきた。例題を用いて蓄積した知見を解説する。
林 香里	クロージング	東京大学	「自営労働」概念と日本における専門職(プロフェッショナル)定着の困難	会社中心で労働のイメージが発達してきた日本では、「専門職(プロフェッショナル)」という概念はなかなか根付かない。しかしながら、今日、産業構造の変化とともに、会社中心の集団的労働から、専門知に基づく個人の自立した労働へと働き方も変化している。とりわけ、いわゆる知識／文化産業において「フリーランス」たちが担う役割は、年々重要度を増している。ドイツの労働社会学では、こうしたタイプの働き方を「自営労働(Arbeitskraftunternehmer, Self-Entrepreneurial Work Force)」と名付け、新しい時代の新しい働き方として、社会的に認知し、制度化していこうとする動きがある。講演では、この「自営労働」という考え方について紹介するとともに、それを参照点にして、日本における文化産業の「フリーランス」たちの処遇の改善の可能性と限界を考えてみたい。